

111  
357

館書圖京東				
一	一	一	一	一
四	五	架	函	類
冊	四			門
	號			

魏紫雲遺愛集

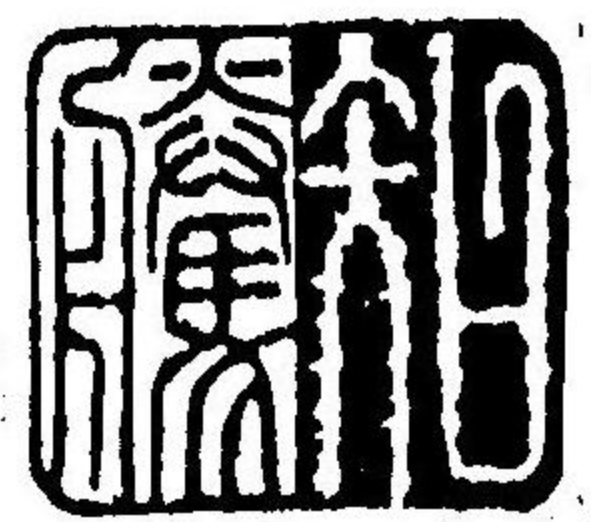
福因

一

伊藤道保編輯

# 筑紫遺愛集

度應成辰新鐫 雙尾舍藏



序



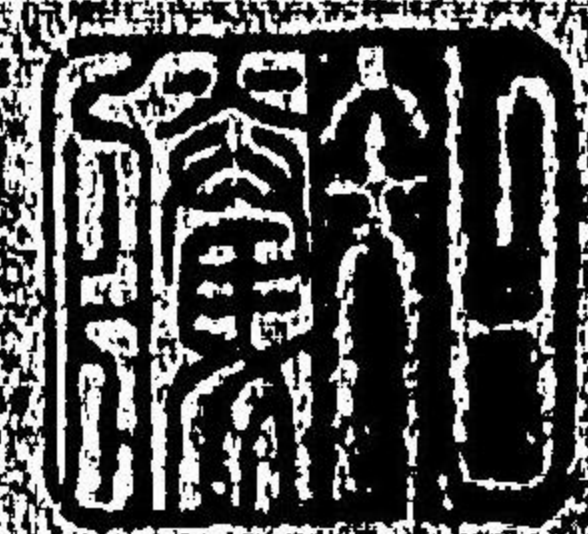
伊藤花守翁輯封內良民  
有雅典者頌曰筑紫遺愛  
集欲鑿梓以傳諸世請于  
官先之蓋以其俚言啓  
群蒙而便于民也方  
有教世覺民之書不為不  
多樂而載之空言不也見



伊藤道保編輯

# 竹筴紫遺愛集

慶應戊辰新鐫雙尾合藏



序



伊藤花守翁輯封內良民

有強曲者頌曰筴紫遺愛

欲鍍梓以傳諸世請于

允之蓋以其俚言啓

群蒙而便于民俗也方

於教世覺民之書不為不

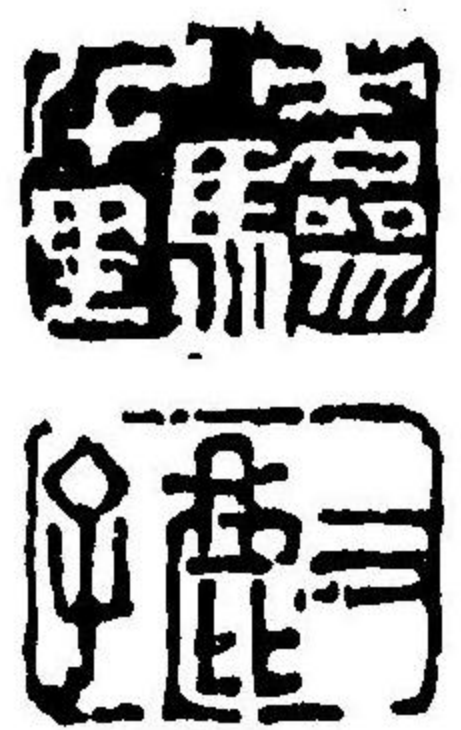
多災而載之宜言不也見



諸行事也求之故事不如  
禮法也求之仙經亦  
如運取法封肉之深切著  
明也若果道人之善如此  
亦可謂勤矣則斯書之行  
豈不有裨於世道也哉臣  
矣  
官之允其請也嗚乎區區

細民目不能辨丁字而所行  
往往合於聖教雖由  
風化之隆盛亦有民彝不  
可誣者也是臣修於世而  
不沒其善焉臣者剗剗物  
後以郡宰暇塚先問序於  
年曰諾哉刻成則請頒  
諸郡是時慶為戊辰清和

月北法橋田駿撰



水聖直書



何及あるものぞうらむはなればなり  
 此國の民衆はなほなほ  
 福もなき事なり  
 心もなき事なり  
 事もなき事なり  
 心もなき事なり  
 事もなき事なり  
 心もなき事なり

序

二

あはれに御座りてはなほの御座り  
まはるる御座りてはなほの御座り  
まはるる御座りてはなほの御座り

増態

あはれに御座りてはなほの御座り  
まはるる御座りてはなほの御座り

梓弓おーと春西あーとまはるる御座り  
くまのまはるる御座りてはなほの御座り

天皇のまはるる御座りてはなほの御座り  
のまはるる御座りてはなほの御座り  
りてはなほの御座りてはなほの御座り  
まはるる御座りてはなほの御座り  
まはるる御座りてはなほの御座り

國一宗廟の祀に建ちての善徳の徳を以て  
身一素より善徳の徳を以て徳を以て  
一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
ら一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
一徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て

徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て

行忠義貞節勳功文雅長壽子孫繁榮  
の者に至るはたゞ書集の末の事  
残一々の現身の事と云ふは  
かゝる一々の事と云ふは  
おぼしき事と云ふは  
と云ふは  
たぢぬ事と云ふは

せうは  
書の  
の  
一  
の  
と  
と

公一奉りたる事と云ふは



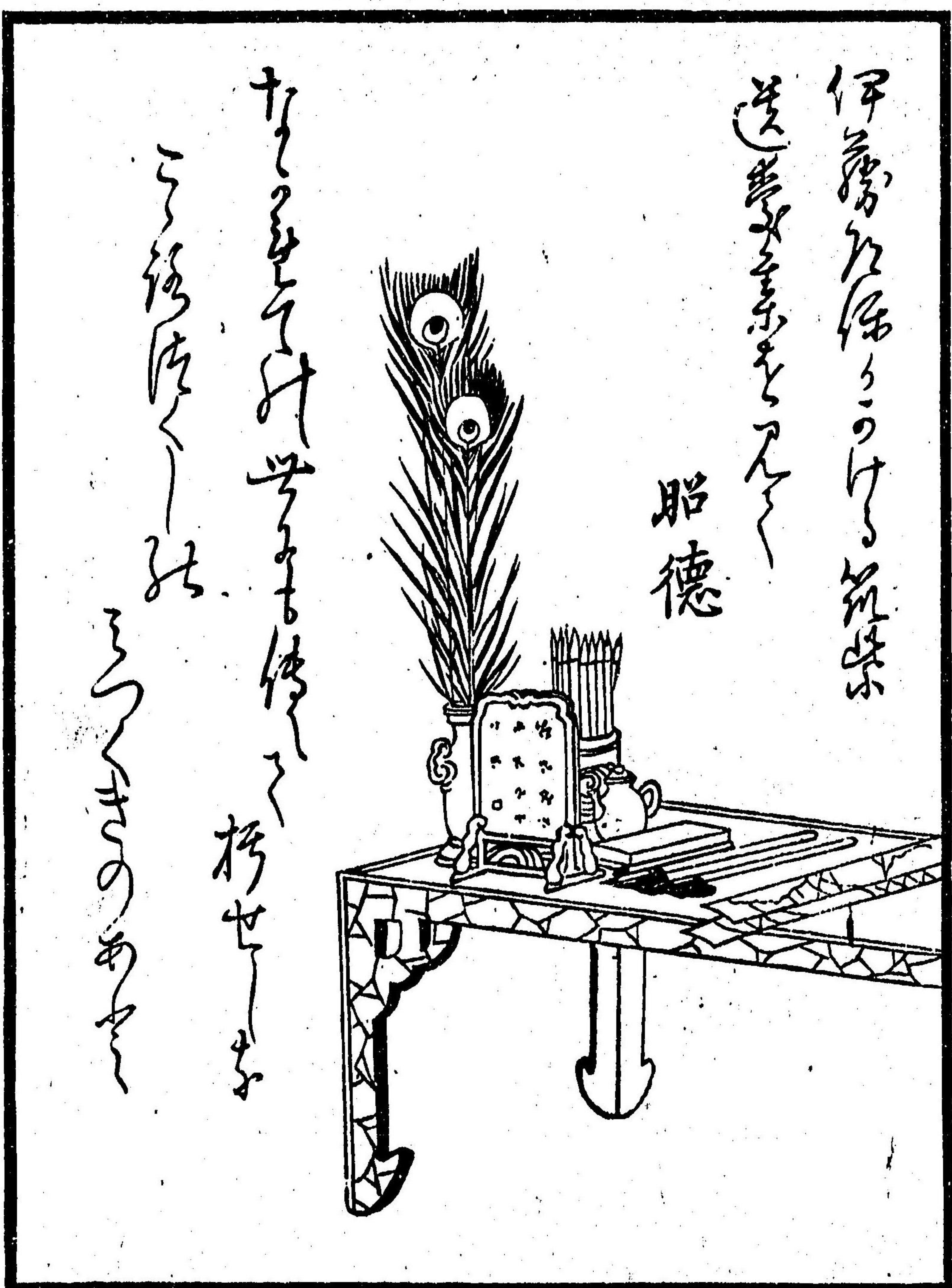




叶ひてふらふ其餘夢のさくらさくらあやとく  
 慶應二年の四月に於てはたかく其事を  
 述ぶるにさき一節あり

本年

伊藤道保



十の...  
 杉せ...  
 ...

凡例

一 凡此編ハ孝心奇特忠義貞烈文雅長壽子孫お昌の者の旗  
表セし者一 履書をとりてそのよしを見ずともを併せて  
採録せり

但善行は悉農業出精風俗宜者一とてその違ひを  
されを皆奇特とす

一 孝心奇特長寿の子孫繁榮の者ハ寛政二年より慶應三年  
までの人を載たり

但孝志者遠賀郡芦屋町云々一并お者お名お屋位お坊

平山久入彦 博多森長右衛門 鞍手郡四郎丸村古野  
三郎右衛門 遠賀郡志摩所 佐々島左衛門 安政以前の  
人などとも是を載す

- 一 勤切者 正徳年中より安政年中までの人を集むる
- 一文雅者 元禄年中より享和年中までの人を集むる

但遠賀鞍手志摩三郡の人の名を志すべし  
編みあはせしむ

- 一 此書弘化元年の筆を起し 享和永圓を編みあはせしむるを  
安政已まざるに續編をあらしむる人を一姓一姓に

上まきりしをこの様に上まきりしはまきりし人のあはれ  
名の記ししより今行条をのすまきりしはあはれ  
今ひそひ國內を巡り送編を補んとおもふる原志ひ  
ぬれに終るべきなりとてまきりしはまきりし人のあはれ  
補ひしなり

- 一 編中多く古人の名を記す今人の名を記すはされし載せり  
但行条のまきりしはまきりし人の名を記す例を  
けししは 志摩者 穂皮郡大分村 佐々島郡尾倉村  
此の昔年持者 日那 拂川村 大分屋 三輪 佐一 勤切者

上座郡池田村大庄屋井手一平平字係郡徳寺村大庄屋  
 石松信光文雅者壹名郡別府村大庄屋仰木常隆  
 才のこま

一 賞券を蒙り一年月の考へらるる事ハ功とあり祥あり  
 さしは其部の志とのせとて或は時代のたらしめ人  
 らせしもの中りをいふされとあり

この後入をより社せりかといふ智の力もさす事とあり  
 たるもたれハ文字のあやまり文字のさしとさしとをばと  
 ありありと見え見え人平らひて

福岡

孝心者二拾三人  
 奇特者八人  
 忠義者六人  
 貞節者一人

博多

孝心者八拾四人  
 奇特者八人  
 忠義者拾二人  
 貞節者二人

怡土郡

孝心者二人  
 奇特者一人  
 勤功者二人

志摩郡

孝心者拾一人  
 奇特者六人  
 勤功者三人  
 文雅者一人  
 長壽者一人

早良郡

孝心者拾三人  
 奇特者拾四人  
 忠義者二人  
 勤功者三人  
 長壽者一人

那珂郡

孝心者九人  
 長壽者一人

席田郡

孝心者一人  
 奇特者二人

御笠郡

孝心者八人  
 勤功者三人  
 奇特者四人

上座郡

孝心者拾三人  
 勤功者一人

下座郡

孝心者六人  
 奇特者三人  
 長壽者一人

筑紫遺愛集卷二目錄

福岡

孝心者

本町	大工町	魚町	西町	紺屋町
茂吉	善右衛門 兵次	市右衛門	新藏	政都

唐人町	西町	藥院町	湊町
惣右衛門	清藏	新助	喜平

唐人町	本町	大工町	湊町	本町
茂七	七五郎	藤吉	庄七	助三郎

福岡目錄

夜須郡

孝心者四人  
奇特者一人  
勤功者二人

表槽屋郡

孝心者二十三人  
奇特者九人  
勤功者一人  
長壽者一人

裏槽屋郡

孝心者二人  
貞節者一人

嘉摩郡

孝心者五人  
奇特者八人

穂波郡

孝心者二十一人  
奇特者拾六人  
勤功者一人  
忠義者一人  
貞節者一人

孝心者三拾五人  
奇特者七人  
勤功者拾三人  
文雅者四人  
長壽者二人

遠賀郡

孝心者四拾三人  
奇特者五人  
勤功者二拾二人  
忠義者二人  
文雅者九人  
長壽者四人  
子孫繁昌者二人

宗像郡

孝心者二拾一人  
忠義者二人  
勤功者七人

奇特者九人  
貞烈者一人  
長壽者一人

老寫町

源四郎

西町

善五郎  
孫平

大工町

利三次

實子町

甚平

緋屋町

万吉

西町

儀助

奇特者

西町

佐兵衛

同町

太田善藏

同町

太田佐兵衛

木町

平山大藏

同町

平山久助

湊町

加瀬茂作

唐人町

清次

藥院町

忠義者

湊町

源右衛門  
伊助

西町

藤助

久助下人

吉次

本町

藤八

實子町

惣吉

大工町

善八

貞節者

藥院町

熊藏  
妻

奇特者補遺

春吉町

宗右衛門  
庄次郎



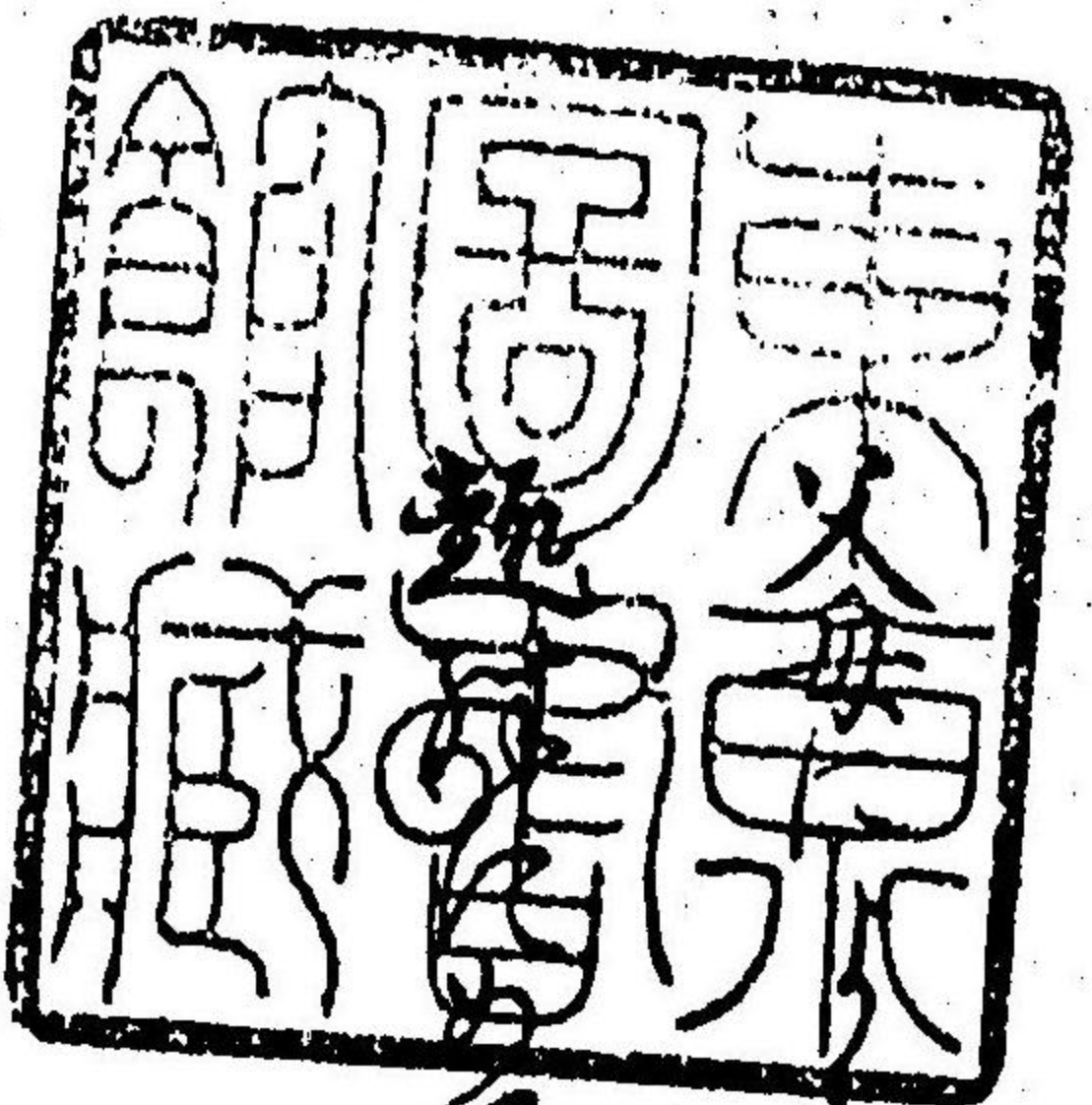
筑紫遺愛集卷一

福岡

孝心者

政都

伊藤道保編輯



政都ハ紺屋町ニ住ル育人ナリ...

事ハ育人の身ニ...

寛政七年卯月...

喜平

喜平ハ淡町の人...

日雇稼を生業...

福岡

三











お徳の深切は介抱して晝夜何れも心とて母の心よ  
けりともむねとては孝養厚かりし事古徳門の事と夫  
の孝行も化へ共に忘るゝお徳のけりも幾福もく  
母お泉ともり其後追孝の志存り忌日年回りの香花湯  
茶とる向意は其時この祭りと營りし事且市太  
郎といふ者幼年けりし病身にくち臥居けりしと  
昔より夫婦は兵次徳をたに念はりしお徳の町内の  
交りし事お徳の母も孝養の徳も奇特ありし事  
公聴は達し文化十四年丑十月十日に銅若千と給ひし事

仁右衛門

仁右衛門は兵服町の人也家号を寫屋とらば生得眞實あり  
者よく獨母の事よく孝養徳の勝せし事かた初より  
母の病を不背妻もあなまり呼入られし事母に  
事の方よりし事ハ難むせり其身を老むる及ひ  
家事不自由ありし事夜更の事老母浴より必  
附添ひし事風雪の出入りし事と助け何んも  
心を配り孝孝心ありし事 公聴は達し文化十四年丑  
十月十日に銅若千と給ひし事

七五郎

七五郎八本町村八より父者のふりしふまゝに孝けけりし  
初めより家職を勤み父をたじ日と職業しむる仕方の  
道にうゝ父と志をそくあまも尚父又母より孝養を  
厚く兄弟の中らひひりて睡床の姉妹より他をく嫁し  
諸人の交りも柔かき孝心奇特なる由

公聴に達し文政二年卯二月を綱若子と給ひけり

茂吉

茂吉八本町村八より母を孝に侍りし也初めはけりし物に











利三次

利三次ハ大工町の人もり資節實實を考よく初年のころ  
父を離れ福母を奉へて孝養あり成長し隨たひ官職を  
勵むる母病をみるに臥せしむる病謀とありかゝる終  
にお果てし以後ハ福母を孝養せしむる志あり  
お親の忌日ハ必寺へ参りて香をたぐひて追孝の志あり  
町内の交り中官受かきと乞奉持あり趣 公五年壬辰天保  
十四年卯八月十日宛書すと終り

甚平

甚平ハ簗子町の人也家号を天王寺屋といふ平日質実あり  
者にして早に母を離れ父に侍りて孝養あり父の病を  
治すに好むるを志し治すに要するは悉く治せしむるに  
志あり父の病を治すに要するは悉く治せしむるに志あり  
あつては母を養ふに志あり父の病を治すに志あり  
いふ事よおの病を治すに志あり父の病を治すに志あり  
交りし中を奇特あり由 公聽にたりし青銅若子と書し  
賞し給ふに由

万吉

万吉ハ紺屋町常盤文七下人あり宗儀初武代村の者なり生  
得多愛あり考之寛政巳年より文七の末に生れしより十三年の春  
つゝの昔に父のなまを傳ひ傳きしより万吉をよそにせし  
はく文七末のひちちを万吉とて傳きしより八年をよそに傳  
家業をよそに別村をゆけしを道と名も無昌とてしを父母  
武代村をよそにけしより多しを志し父宗助若年のはより母の  
高ひありて農業のよそに生れしより万吉をよそに傳きし  
知るより父母にたがひたがひ自由をよそに仕後し勤のよそに

を自合を傳しより父母をよそにけしより父のよそに  
いふ事し法人に對し傳きしより考之のよそに  
公聽米若干を傳しは文化六年巳三月ありし

儀助

吾々儀助ハ西町の人あり文化六年六十一歳に生れしよりそのま  
文化之より飯倉村の抱へ原より父を傳ししより考之の  
けしより母を傳ししより考之母九十歳極元かり其身は進退も  
心よ任せしより儀助衣袴の穢をけししより考之飯倉に云  
よそに考之のよそに考之母考之のよそに考之のよそに

必求く世のしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
と其の類を以てしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
母のまゝに終つたしむる志を以て孝の者多し由達 公徳文化元年  
巳九月十日 釣着千を以てしむる

奇特者

佐兵衛

佐兵衛の西町の人也家業を以てしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
あつて年登りしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
けきく 上なるはく哀憐を以てしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
多ひけきく西町の字に任せし家業のしむる地を以て

かゝるしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
あひにけきく西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
白銀とすしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
孝あひ白銀五枚ぬけしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
享保十八年丑九月十日

太田善藏

高田善藏西町の人とすむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
いへ連ひけきく西町の字に任せし家業のしむる地を以て  
夜の家を捨つしむる西町の字に任せし家業のしむる地を以て

志達 公穂料理頂戴せしむる旨銀拾五枚を納りし由  
天保二年卯二月ありき

太田佐兵衛

太田佐兵衛の西町より一年行司を勤めし生計多末貞直より  
常々俸給をむねしく法念を能くし父母を孝くし行事の方より  
しるしをいふ事なきが故に父母より極意にけりし長病  
に草草に世の中におもひに死すべしと志する人  
とて時より一々一々との考をいふに愛憐を加へ奇特の  
者ありし由達 公穂嘉永元年申十月銀二枚を納り

九今人の七十以上より書載たれども佐々南の先代より後々  
幾多の奇蹟ありし数代の人をいふ事善行ありしに自ら月には  
らけし事なき事ありし都ていふにけりし事なき事ありしに  
ありし

平山丈藏

平山丈藏の本町の人にて家号を平山といひ生得貞直より  
深く貧窮の者より物を無く衣服をせざるより奇蹟ありし由  
心より奇特の者ありし事なき事ありし天明八年三人扶持を承  
代より貞直丈藏の奇蹟ありし事なき事ありし事なき事ありし

















一家名刺宛にありし町内居後、中宮廟の先祖の木牌を自  
分の家へ引取り、長日、日那寺より浄念寺へ物を納め、墓所を移  
して、この年回すより、墓所を移し、浄念寺の住僧  
惣吉の志を感し、中宮廟の墓を建て、移し、浄念寺の墓所共  
のち惣吉建し、この寺に、家の位牌を、座持を、中宮廟の  
者より、引取り、移し、惣吉の、自願より、後人の交り、中宮  
年、忠義を、あり、考持する由達、公徳文政十年、子、月、未、五  
俵を、褒美、あり

惣吉の家の素より、長日、日那寺より、浄念寺へ、物を、納め、墓所を、移し、  
この年、回すより、墓所を、移し、浄念寺の、住僧、惣吉の、志を、感し、  
中宮廟の、墓を、建て、移し、浄念寺の、墓所共の、ち、惣吉建し、  
この寺に、家の、位牌を、座持を、中宮廟の、者より、引取り、移し、  
惣吉の、自願より、後人の、交り、中宮、年、忠義を、あり、考持する、  
由達、公徳文政十年、子、月、未、五、俵を、褒美、あり

善八

善八、大町の、酒も、古ね、屋次、酒、の、下人、より、引取り、浄念寺へ、あり、  
て、浄念寺へ、移し、この年、回すより、墓所を、移し、浄念寺の、住僧、  
惣吉の、志を、感し、中宮廟の、墓を、建て、移し、浄念寺の、墓所共、  
の、ち、惣吉建し、この寺に、家の、位牌を、座持を、中宮廟の、者より、  
引取り、移し、惣吉の、自願より、後人の、交り、中宮、年、忠義を、  
あり、考持する、由達、公徳文政十年、子、月、未、五、俵を、褒美、あり

後 海造は好言せしむる者なり忠勤を以てして教達

公聴天保十一年子四月青銅着子と号す

貞節者

熊藏妻

熊藏妻は宗院町に居り其の節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年

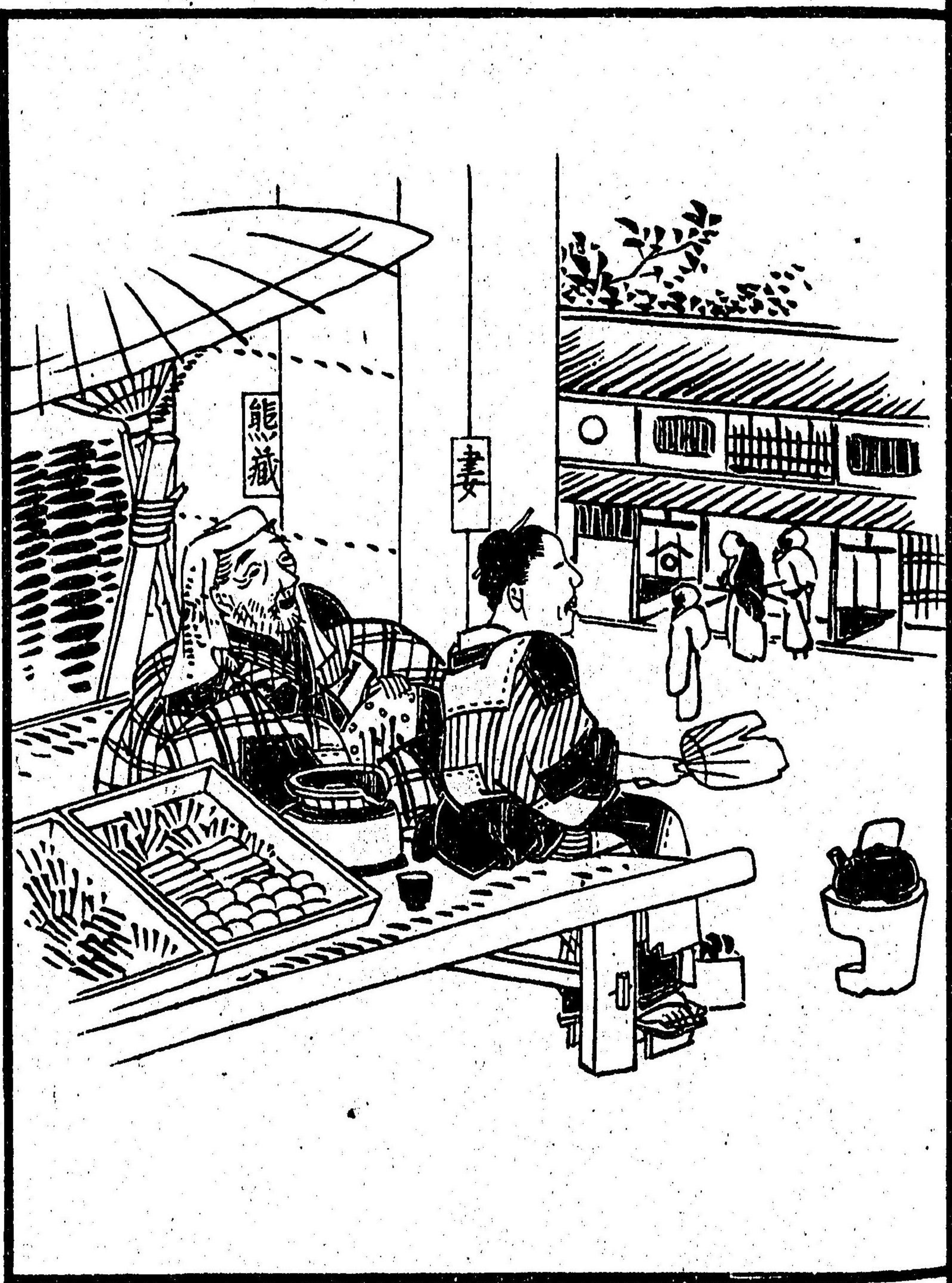
風を病み候子に於ては其の節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年

妻は菓子や餅を賣りて其の節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年

その節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年

その節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年

二年に於て相若子を治ひり熊藏の節行は世に傳へたるに夫は延元二年不令年





續藏子生(一) 續藏子生(二) 續藏子生(三) 續藏子生(四) 續藏子生(五) 續藏子生(六) 續藏子生(七) 續藏子生(八) 續藏子生(九) 續藏子生(十) 續藏子生(十一) 續藏子生(十二) 續藏子生(十三) 續藏子生(十四) 續藏子生(十五) 續藏子生(十六) 續藏子生(十七) 續藏子生(十八) 續藏子生(十九) 續藏子生(二十) 續藏子生(二十一) 續藏子生(二十二) 續藏子生(二十三) 續藏子生(二十四) 續藏子生(二十五) 續藏子生(二十六) 續藏子生(二十七) 續藏子生(二十八) 續藏子生(二十九) 續藏子生(三十) 續藏子生(三十一) 續藏子生(三十二) 續藏子生(三十三) 續藏子生(三十四) 續藏子生(三十五) 續藏子生(三十六) 續藏子生(三十七) 續藏子生(三十八) 續藏子生(三十九) 續藏子生(四十) 續藏子生(四十一) 續藏子生(四十二) 續藏子生(四十三) 續藏子生(四十四) 續藏子生(四十五) 續藏子生(四十六) 續藏子生(四十七) 續藏子生(四十八) 續藏子生(四十九) 續藏子生(五十) 續藏子生(五十一) 續藏子生(五十二) 續藏子生(五十三) 續藏子生(五十四) 續藏子生(五十五) 續藏子生(五十六) 續藏子生(五十七) 續藏子生(五十八) 續藏子生(五十九) 續藏子生(六十) 續藏子生(六十一) 續藏子生(六十二) 續藏子生(六十三) 續藏子生(六十四) 續藏子生(六十五) 續藏子生(六十六) 續藏子生(六十七) 續藏子生(六十八) 續藏子生(六十九) 續藏子生(七十) 續藏子生(七十一) 續藏子生(七十二) 續藏子生(七十三) 續藏子生(七十四) 續藏子生(七十五) 續藏子生(七十六) 續藏子生(七十七) 續藏子生(七十八) 續藏子生(七十九) 續藏子生(八十) 續藏子生(八十一) 續藏子生(八十二) 續藏子生(八十三) 續藏子生(八十四) 續藏子生(八十五) 續藏子生(八十六) 續藏子生(八十七) 續藏子生(八十八) 續藏子生(八十九) 續藏子生(九十) 續藏子生(九十一) 續藏子生(九十二) 續藏子生(九十三) 續藏子生(九十四) 續藏子生(九十五) 續藏子生(九十六) 續藏子生(九十七) 續藏子生(九十八) 續藏子生(九十九) 續藏子生(一百)

奇特者補遺

宗右門 庄次郎

松平左衛門右衛門彦次郎父子は善寺町に在りたりは家  
 たり者として多人民救済の心をよせ多く義教を授けたり  
 とて能く善寺町に在りたりは後年徳理の道をも  
 中よ預けの如く由りて自らをもよく徳後せりか  
 行多きるりて有司達 君聴きたる家左衛門八年始の  
 礼を免され彦次郎の用安町人列よありたり父子とも軽き  
 修め職を免されたりは徳の如く授けけりたり  
 をも命せられ永く三人徳を勉む是安永八年の事なり  
 嘉永年中迄存生者

孝心者

文政三年辰 萬町 文政五年午 箕子町  
 九月称譽 龜吉 八月日 鏝五郎  
 文政六年未 大工町 天保十三年寅 萬町  
 四月日 徳右衛門 三月日 赤座門娘 小く

忠義者

文政三年卯 本町 文政五年午 唐人町  
 十月称譽 七五郎 七月日 惣右衛門  
 文政五年午 湊町  
 八月日 太吉

奇特者

嘉永五年子春吉寺町  
閏二月日 文七

宛然遺集卷一終

沈氏遺集

博多上

二

111  
234

館書圖京東			
一	二	一	
四	五	一	
冊	號	架	類門

筑紫遺愛集卷二目錄

博多上

孝心者



店屋町

魚町下

松永徳兵衛

磯八

甚平

久平

惣五郎

桶屋町

釜屋番

鯛町

藏本番

魚町上

次六

柴藤善左衛門

仁右門

又次

伊勢松



今隈町

店屋町

辻堂町上

袖屋番

衣笠雲山

吉次郎

松永宗助

市次

次吉

博多上

洲崎町

與平

金屋路

伊之助

祇園町

宗七妻

瓦町

伊右衛門

魚町

猪六

馬場新町

喜世都

櫛屋番

伊右衛門

同上

利右衛門

北船町

徳次

濱口町

安平

土居町

庄七

藏本番

惣助

新川端町

七次

落屋番

後家

片土居町

後家

洲寄町

市次

川端町上

市右衛門

土堂町上

利作

金屋路

清吉

網場町

源次郎

對馬路

藤次郎

濱口町

吉右衛門

市小路町上

徳平

網場町

仁三郎

祇園町上

半右衛門

西門町

甚吉

御供所町

甚藏

解町下

七五郎母

洲崎町中

勘次郎

西町濱

喜七

金屋町

弥七

市小路町下

久八養女  
たけ

東町

半兵衛

古小路町

忠平

堅町濱

兵衛

北船町

左徳兵衛

片土居町

幾次

西町濱

茂平

魚町

鶴松

奥小路町

八十吉

橋口町

次六

東町下

茂兵衛

金屋番

源右衛門

博多上

二

筑紫遺愛集卷二

伊藤道保編輯

博多上

孝心者

甚平

甚平、桶屋町の人なり。生母を愛する者なり。桶屋を業とし

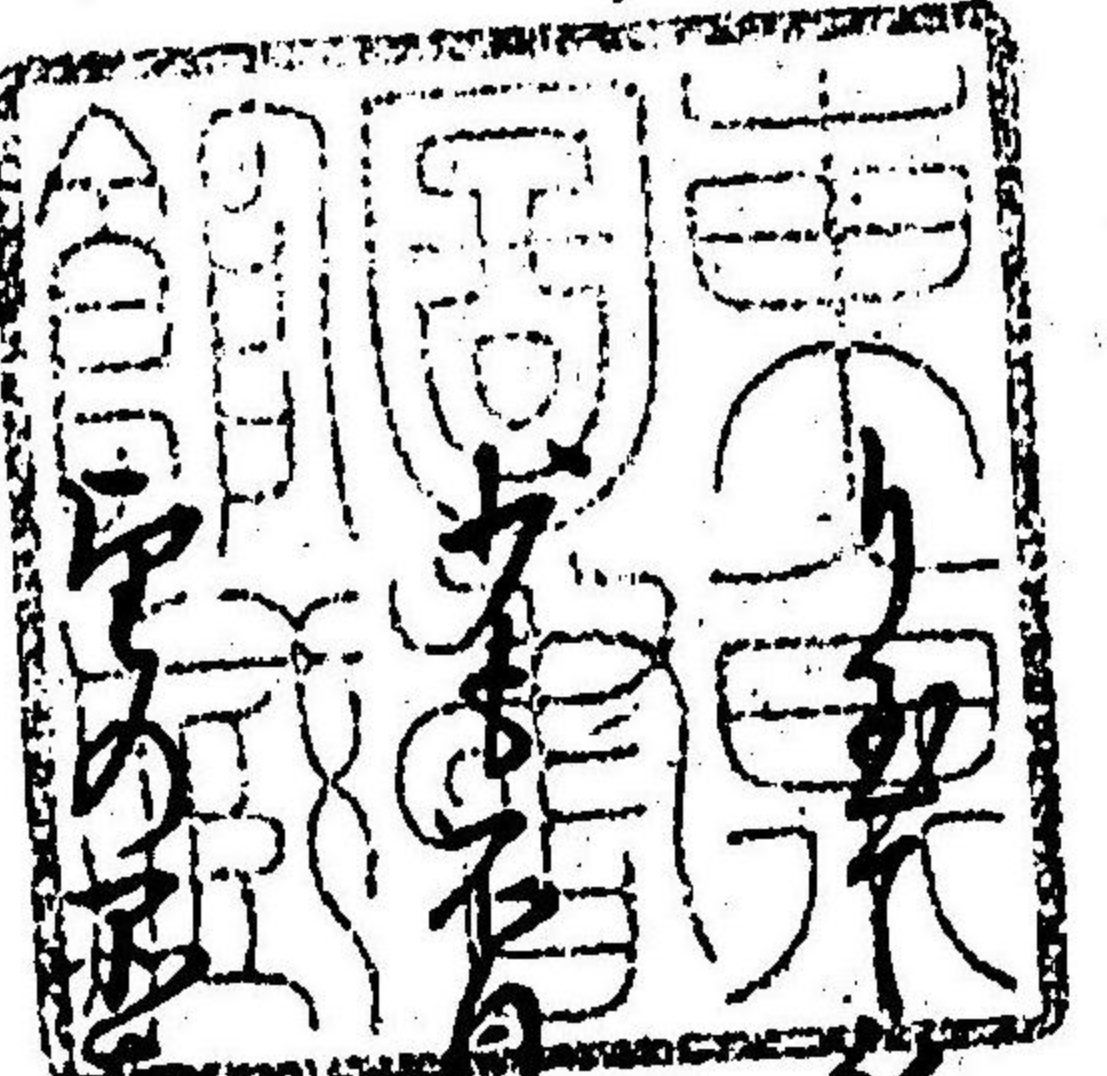
多病に苦みけり。母を養ふに精を盡し。母を

孝に奉り。母を養ふに精を盡し。母を

母を養ふに精を盡し。母を

母を養ふに精を盡し。母を

辰有、養ふに精を盡し。母を



博多上













巻一のいさ

惣五郎貞家子と相成り父母より法之弟と稱せ  
お察方より妻を娶り一人とて孝養をせしは誠之の業  
ひいしちのりなり

仁右衛門

若見屋仁右衛門、船町の介なり、八歳より父を養ひひいし母  
の喜ひしをいひて入道なり、父死てより次子より養ふ事あり、  
りよまののりなり、母病なりより服をも夜み法なり、  
自由なりとて仁右衛門と稱せしは孝養と稱しけり

仁右衛門天徳寺に安んずる者なり、お察方より法之弟と稱せし  
るも実自由とあふ昌一父なるの時方なり、仁右衛門  
と名をいひしより達 公徳文化二年三月に相成りしを  
揚りたり

松永宗助

松永宗助、店屋町に信之弟なり、極めく命なり、幼年  
より父母より法之と名をいひけり、父徳右衛門とて名をい  
高なり、母由重中風をとりしは身障なり、を夜に安んず  
心よりけり、父病なり、介保方なり、



行實達 公聽文政五年午育之移之獨のまゝ之入林  
よまて人扶持する一世にふりて其のありのまゝを命せしめ  
年始の礼をも免一の其後文中風をまゝに古用の歩  
行も石自由なり一に徳兵衛すましく西海をまゝ一介抱一  
整付舟立自ら是を掛けおつて一徳兵衛の徳兵衛が  
仁愛ふまゝにあらしむる一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
まぢもむし一のまゝにあらしむる一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ

おまひり

又次 父の母に孝を盡し一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ

又次

藏本番角倉又次おまひり一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
又次人の命をまゝにあらしむる一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
家上番を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ  
一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ一徳兵衛の徳兵衛を命せしめ

行を勤りたりきり父死後進者の志も厚く下人を懐く心を  
 用ひ家内賸まりし町内の交り柔順なりし高き年よりもと居  
 夜終ると知りける由可なりし達 君聴たす文化二年丑  
 三月十日朔若子とるけり寝袋せむ勢のひぬ

市次

辻堂町上除助下人市次、伊豆郡永園村の百姓立りし者  
 の子なりぬきの時母ふ静を父の昔育ちて成長せり市次  
 兄弟あり歳七しりしに母を失ひ父吉六罪ありし先母  
 寄之を流せりし文化二年六年余歳病身なりしに





たゞに難美一けし由市次兄才きはけ兄茂七父の代りに  
出立兼り老父を侍奉せしんらねんことを預け申すまは  
まて兼子のまゝ田島赤の作方も不折屈なきまゝ村役  
人とも包むし評候一けしお柄市次兄の孝をまつ事自  
身のまゝとすし老父を侍奉せしめりたらく奉行  
許し預けたり其府市次年ニ入たり市次兄自より赤助の  
家よまじりけしるま人の勤をまじりていさゝかといふま  
給程も母のえんぢりえんぢりを境ある父の純す徳の節し  
て不自由かりしん孝をらせし慈徳を達 公聴市次

孝心まゝんらり約吉の遠書をまゝに家帯りめ  
らまじりしまた文化二年丑四月をりき

市次身よりいさゝか父を侍奉せしめんことを  
しるし海内の上と達し父の罪を申すこといさゝか  
備へ市次がま孝の志しりたり

磯八

魚町下磯八の振治を事業せり幼年のは安父お果母後  
夫を介し磯八生らるる安父と親し居る方其よりさう後  
又年吉石持の者まゝ渡世を担りまじりし磯八艱辛を



配り孝養をなせしむるに世ありては建  
公藤文化三年と云うるを世に告ぐる

次吉

次吉は桐屋菊次平より書のことなりと云ふに父母を奉  
養に専らし教のやまにありては世に告ぐるに事  
小事は皆父母に次平より行りては世に告ぐるに事  
まゝに事なす安の者なり由有る君藤達一に告ぐる  
文化三年二月と云うるを世に告ぐる

興平

平は屋世平は洲崎町と云ふに世に告ぐるに事  
美をなすに事なり父某六年に事なすに事なり  
介抱に事なり死後追孝の志をなすに事なり  
を能く事なり世に告ぐるに事なり家蓋に事なり  
り行ひおのつらと云うるを世に告ぐるに事なり  
公藤文化三年寅月と云うるを世に告ぐるに事なり

伊之助

金屋小路町惣次郎より子に伊之助と云ふに事なり  
る者なり平自れ事をなすに事なり世に告ぐるに事なり  
父惣次郎多年病に事なり歩行不自由に事なり





追孝もたゞしき事なりしに後父より孝を慕はせし  
中をも愛撫せし趣達 公藤文化九年七月朔日  
知る平日の行末を告ぐる事

喜世都

警者喜世都馬場新町に居り生母の純孝なる者は  
父母の孝を慕はせし事ありて母異祥の病に患ひけ  
せし世都又父を病に患はせし事ありて母を  
養はせし事あり一日に宴席成り子弟の愛を  
承けし事あり出入りし事あり

とひ兄弟を推しし事あり甚だしくけり世都三味線  
能いけし事あり父を養はせし事あり母を  
達 公藤育人の身なりか行ひ奇特なりと  
を准發し其孝を慕はせし事あり文化九年申七月  
伊右瀧門

宗良公為伊右瀧の生母願意し者あり  
をけり家内睦まじき事あり伊右瀧の知りし母を  
父と母を養ひし事あり父文化九年より三年  
其病中終りし事あり父文化九年より三年  
其病中終りし事あり父文化九年より三年

ら試みて進んて二使の機<sup>は</sup>を<sup>し</sup>ら<sup>る</sup>く<sup>人</sup>を<sup>し</sup>の<sup>け</sup>き<sup>何</sup>の<sup>せ</sup>と  
介保<sup>し</sup>を<sup>し</sup>け<sup>り</sup>も<sup>も</sup>又<sup>は</sup>後<sup>に</sup>母<sup>は</sup>け<sup>る</sup>方<sup>ま</sup>り<sup>あ</sup>  
け<sup>る</sup>少<sup>も</sup>母<sup>け</sup>る<sup>を</sup>看<sup>る</sup>て<sup>り</sup>一<sup>日</sup>に<sup>辨</sup>り<sup>可</sup>なり<sup>と</sup>  
も疎<sup>ま</sup>漫<sup>し</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>美<sup>術</sup>行<sup>ひ</sup>の<sup>務</sup>を<sup>し</sup>て<sup>り</sup>お<sup>も</sup>む<sup>き</sup>せ<sup>り</sup>あ  
ら<sup>る</sup>れ 君<sup>聽</sup>も<sup>達</sup>け<sup>り</sup>て<sup>り</sup>文化<sup>九</sup>年<sup>申</sup>三<sup>月</sup>を<sup>相</sup>あ  
て<sup>を</sup>初<sup>ひ</sup>たり

利右衛門

利右衛門は先づ官を重に任じ日雇或は出立せり世を愛し  
て多分おきけり天性も実力も者よく父母世に

在<sup>り</sup>時<sup>忠</sup>告<sup>を</sup>し<sup>て</sup>あ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>父<sup>を</sup>移<sup>し</sup>て<sup>り</sup>僅<sup>日</sup>  
雇<sup>の</sup>内<sup>より</sup>実<sup>求</sup>め<sup>て</sup>進<sup>む</sup>て<sup>り</sup>日<sup>雇</sup>の<sup>内</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>  
父<sup>身</sup>する<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>母<sup>を</sup>い<sup>は</sup>し<sup>て</sup>り<sup>母</sup>病<sup>ひ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>  
一<sup>日</sup>に<sup>介</sup>保<sup>を</sup>し<sup>て</sup>り<sup>日</sup>雇<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>り</sup>り<sup>會</sup>合<sup>を</sup>し<sup>て</sup>  
水<sup>母</sup>の<sup>も</sup>自<sup>由</sup>な<sup>り</sup>て<sup>り</sup>の<sup>お</sup>き<sup>て</sup>り<sup>母</sup>病<sup>ひ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>  
体<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>り</sup>安<sup>否</sup>を<sup>し</sup>て<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>り</sup>を<sup>し</sup>て<sup>り</sup>  
と<sup>も</sup>ん<sup>す</sup>日<sup>雇</sup>に<sup>行</sup>く<sup>も</sup>人<sup>を</sup>し<sup>て</sup>り<sup>日</sup>雇<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>り</sup>り<sup>會</sup>合<sup>を</sup>し<sup>て</sup>  
安<sup>否</sup>を<sup>し</sup>て<sup>り</sup>安<sup>否</sup>を<sup>し</sup>て<sup>り</sup>公<sup>聽</sup>文化<sup>九</sup>年  
申<sup>三</sup>月<sup>を</sup>初<sup>ひ</sup>たり





交血癩ちゆうせきに於けり持もきく病びょう入よき病びょうを存す温頓  
ナレ者ものよく永とこの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけりけり  
るをそへる會かいの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけり  
まその病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけりけり  
まは病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけりけり  
急いそに於けりけりけりけりけりけりけり  
人ひとの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけり  
世よの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけりけり  
考かうの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけり

惣助

藏本番惣助は足袋屋戸兵衛の次子なり、資質温頓じしつ ぬんぬん  
ぶ者ものよく平ひらに於けりけりけりけりけり  
母ははの惣助知母ちちの病びょう中ちゆうに於けりけりけり  
の養やしやう子こなり、平ひらに於けりけりけりけり  
文化十年ぶん化じゅうねんより十年じゅうねんの病びょう中ちゆうに於けり  
こり言こと又また通とほる者ものなり、平ひらに於けりけりけり  
かきやまひの病びょう中ちゆうに於けりけりけりけり  
ら試しみさす下したなる者ものなり、平ひらに於けりけりけり

身するより、惣助の悲歎<sup>いん</sup>をてまゝに、追孝の志も存せり  
父へも申すより、けりける、甚達 公徳文化十一年、三月  
細若平を初、惣助の志を承りし、ぬ

七次

新河端町下七次、惣助の直下より、若くは野菜を、作りて  
まじりて、其日を送り、甚だしく、其母の事、  
孝あり、平日、惣助の事、  
夕の合、力の知、  
おの便、

父老より、母に、  
て、  
七次、

源三 後家

箔屋番より、源三、  
病、  
母、  
ま、  
か、



望前没せり其眞母を以て頼りて子に未だ知れず其家に入らば  
たゞりしを後家とらむと爲すべしと云ふ者あり信はれず其を  
夜精を以て老翁とて其後を以て姑と爲し之を孝養せしむる事  
さくすくも成る成長一けり其男子勉て下りて二十五六の財  
より大に成りて其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
由りて其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
たゞりしを後家とらむと爲すべしと云ふ者あり信はれず其を  
夜精を以て老翁とて其後を以て姑と爲し之を孝養せしむる事  
さくすくも成る成長一けり其男子勉て下りて二十五六の財  
より大に成りて其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て

市次

洲崎町上市次生得負つる者なく獨母を以て孝あり市次  
年行司の物語を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
町方利向おのりて其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
と其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
孝ありと云ふけり其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
たゞりしを後家とらむと爲すべしと云ふ者あり信はれず其を  
夜精を以て老翁とて其後を以て姑と爲し之を孝養せしむる事  
さくすくも成る成長一けり其男子勉て下りて二十五六の財  
より大に成りて其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て  
其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て其母の計を以て





る事なき事ありて感ありて世の事同達 君聴まじ相若  
予をくらくくきくくくく

源次郎

網場町松屋源次郎 文化十二年四十六歳より廿九日と幸八  
とくつたに因信 髪形松のものを送る 世に後きり父と  
寛政五年よお果母より一十年歳を病ましくお母其と眼と  
やう難き事とせしとお母より一息より一衣松信合は信松のよん  
るにまじくおのけ事なき事と母の事より行はしむるに源次郎  
るにお母より精を吐く夜に母の側へ居る間にお母の物持る

まじくおのけ事なき事と母の事より行はしむるに源次郎  
厚く奇特の者ありて達 公聴まじ相若  
藤次郎

藤次郎

藤次郎 将馬山醫術甲より信る事なき事とけきし父  
母に孝ありて一父儀あり十六歳母十六歳父母より孝  
父自身より信る母に三年中風を頼み其身を石けり  
事には信を好むけり毎夜脊負く風を信る事なき事  
の世に信を好む事なき事と脊負くつきの事と或る寺又町内に見  
物事ありて付かきし事ありて母を信る事なき事

を死す父母の身がかりに孝養誠を以てせりといふ  
且他人の言はくははたしむるは切なりと妻の夫の行ひは  
ひ負ふといふ姑もよく事入庭内の人時を以てせり  
公聴せむれは相違なくしけるなり

吉右衛門

淡口町吉右衛門の言はくは一日も怠り  
て生計よくお極めく事なすといふ言又病身かたし  
介保をうき事ありけりといふ言はくは  
保護甚くしけりといふ言はくは伯父は右衛門といふ

獨りかゝる事ありき言はくは自身の言はくは  
に病を病に生ずといふ言はくは死をせり貧しき  
の五納めなりといふ言はくは其後吉右衛門といふ伯父は  
よき方なりと申す 公聴す相違なくしけるなり

徳平

市路所徳平の言はくは或は言はくは世に後り  
極むる暮りけりといふ言はくは父母は孝養  
をせりといふ言はくは又徳平は年以て中風を  
らひて是れを言はくは言はくは伯父は老老といふ



三つに一つは罵りけりし徳平の志を承せり又病ひき  
まじき一族又官軍の志清一後をなれ毎夜せ  
おひく連りけり又生受海をぬけり又志を承せり  
此も求ゆ進見はあまたの例より縁起付申立を授  
け持つこと嬰女と云ふあつたあつたも又徳平の  
介抱方してとまふあつたあつたも又待りぬ  
聲をとり徳平の叫ぶるを聞きしとて早  
否ともいひ又の志を承せりか又志を承せり  
かへりけりしあひの志を承せりか又志を承せり

たはしむるも苦勞なるを承せりか又志を承せり  
の志は次申す事なりけりか又志を承せり  
一けりし志は徳平の志なりけりか又志を承せり  
さし申す事なりけりか又志を承せり  
才懶惰の者志を授めりか又志を承せり  
か又志を承せり  
徳平の行状達 公徳感賞のいふ事  
子を承りけり

仁三郎

細場町福富屋仁三郎天性の者よく父母を孝養



けり甚吉極あり愛村者に老母は存く孝なり  
老母つ福よ奇業を好むけりあおるるまじ内外の掃除  
老母の心よけよをわみりせりまじ朝晩の食事に滋味を  
わく忠告りわく望みのふあまじを便を惜まじ買米めり  
まじめり毎日あひまじあまじ食料湯糸を化す今老母  
の不自由を手に持ちまじの望み入かまじ志よ安否を  
おしりしむかまじしりしり一年老母申風をとりし西  
不叶まじあひ甚吉まじまじまじを角に二便の穢衣後  
の垢本まじ自身まじ院いん條じょうまじまじまじまじまじ

孝まじまじまじまじまじまじまじまじまじ  
孝まじまじまじまじまじまじまじまじまじ  
公聴まじまじまじまじまじまじまじまじまじ

甚藏

御供所町甚吉元年のころ老母を頼り父六右衛門後妻を  
呼入らばはまじ父育まじまじまじ方難かまじまじ  
焼餅やきもちまじまじまじまじまじまじまじまじ  
長まじまじまじ純朴じゆんぱくまじまじまじまじ  
まじまじの便法まじまじ父母まじまじまじまじ

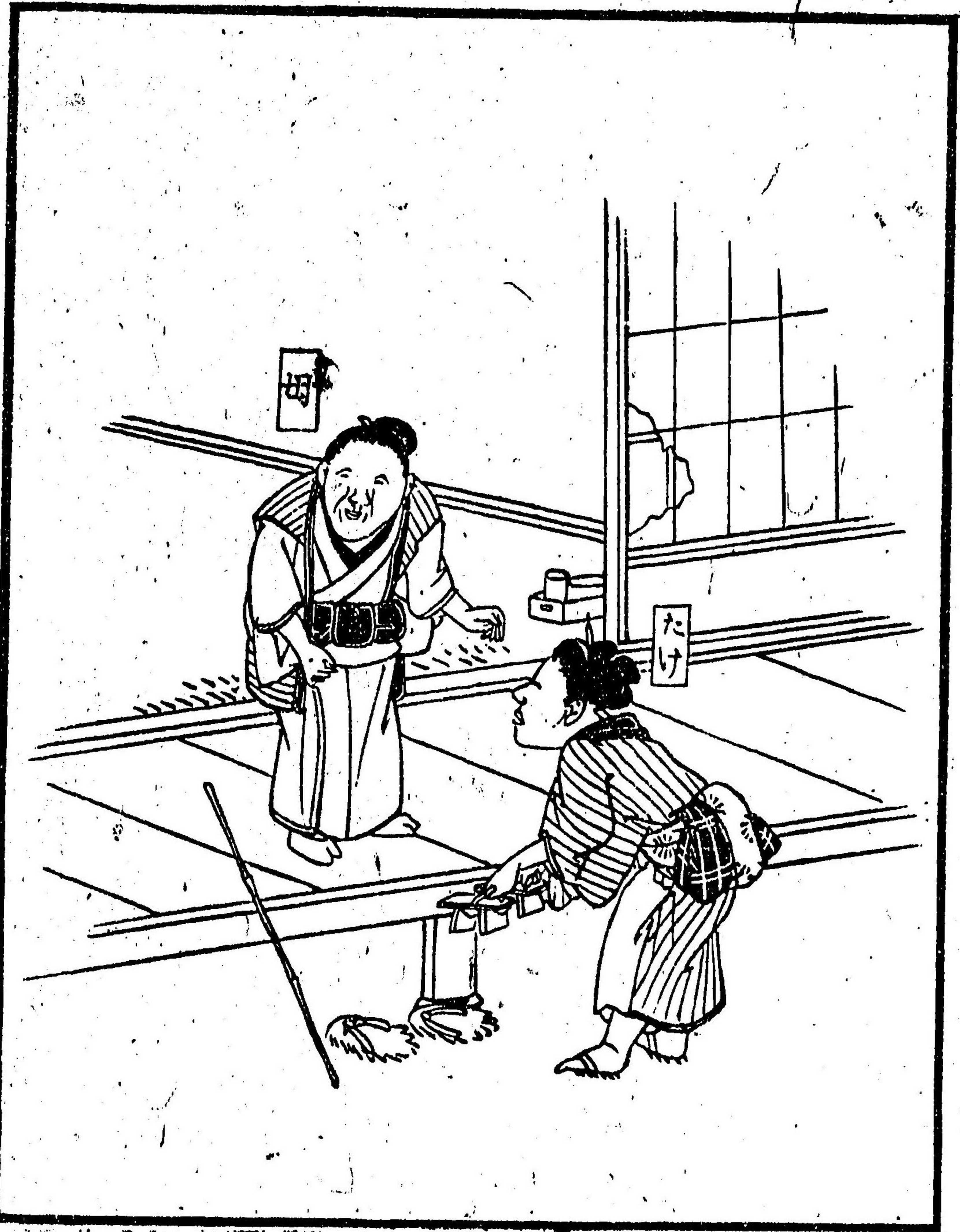






年寄久八抱きしをより昔より子せりたけ天性貞実なる者まゝ知りて昔父母にはく衣履飯食をとりぬ整付生立拵け拵つてしひつとて父母の言はけりしを子なる者昔は数多ありき昔文化八年和母より夫婦睦まゝく昔一けしる毒害の事よりて養父母妻のちつて思ひけりけりたけ甚くつを昔一妻といふあ昔父母をわしけけりしと遂に離れよおより。妻よりけりて入らるる男子四人よりつるる泡瘡もくお果てけり昔父母の悲傷よりあすたけしぬけり。流汗し年よりあつて心

を死り昔言をとおせしむ勢をいせ人うん涙を流す。ちつとつて。或竹堂文上方より昔言をく踏物を拵りて世にんをりやきしより昔母を用ひのて顔よりあけりし昔母よこへ解<sup>た</sup>けりし父の世にのすけり。其は足下にけむいけりあつて昔母よもせ其及自身を用ひしもの世よりたけり教と教愛<sup>けいあい</sup>しものや。了りし昔一たけり昔女を昔父母よあつて愛憐し言をりかきありて相々よりしりて人平日人よ對し和順より後よ。法人の言昔悪法よりしりたけ



孝行遠 公聽米若子を知り厚く褒賞のいさろ

凡女のくせとくあつぬ夫婦の中を離れりて歎き  
 恨むまのけしきさけがも恨む事なきとてん  
 孝父母はく忠孝おとこさるゝ夫は孝心け  
 至誠にあつてあつて何事かこのこゝろもあけ  
 またけ「構はる孝女さく人の子婦たつてのよきま  
 んがらぬ」

半兵衛

東西豊後屋半七藍問屋ちりまきくゝ表紙屋郡守









一 和の行末職を請ふあけ母と夫婦の事なり華の母夜泣  
事と求め細工所（持中）一 庭よりあけ母と夫婦の事なり華の母夜泣  
二 あつひと事なりけりともつとる邊くい糸なるも藤のけりか  
三 子一 胃の痛所（けり）を暖飢渴と云ふ一 一夜の怠りなり  
一 五郎官寺又他所（行時）かきき夫婦のけりけりけり行  
けりけりあつひと事なり敷膳のおさめい達 君聴く事文政  
元年寅十二月癸亥とてま相若下と物なり

幾次

行土居町幾次家入り一 茶煙草志とあひ事なりけりけり  
母文政三年より三年以迄異母の病事なり死せりその  
病中万方けりけり心魂を碎き看病候と云ふけりけり  
母存中が事其事な事なりけりけりけりけりけりけり衣  
後飲食もけり母にけり不自由を自らけり事始末事なりけり  
一 けり幾夜事なり年事申風と云ふけりけりけりけりけり家  
の事なりけりけりけりけりけりけり悔事なりけりけりけり  
心をけりけりけり勝事なりけりけりけりけりけりけりけり  
所行法入の物なりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
ま相若下を考へ事なりけりけりけりけりけりけりけり



大酒をせせり居る夜海世をつよめりしり新松舟子も友

愛有するもくも越達

公徳文政三年辰月十日卯若

子と初いぬ

八十吉

奥出船所午吉父を利在場りしり志望も人共其はあ貴

不景事なりしり上は追<sup>う</sup>老妻<sup>う</sup>おのひはも産業たもく

多末の事<sup>ま</sup>けしりよ<sup>ま</sup>午吉<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>なりしり天性<sup>ま</sup>純<sup>ま</sup>なりしり

了父母の事へくむも事なり毎日<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>なりしりやぶりの利潤を

得く父母を喜ひ衣食の用<sup>ま</sup>仕<sup>ま</sup>せり見<sup>ま</sup>ありしり<sup>ま</sup>放肆<sup>ま</sup>なり

渡世<sup>ま</sup>なりしりありあ<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>なりしりけ<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>追<sup>ま</sup>海<sup>ま</sup>なりしり

た<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>痛<sup>ま</sup>なりしりか<sup>ま</sup>む<sup>ま</sup>父母<sup>ま</sup>密<sup>ま</sup>なりしりか<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>悔<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>去<sup>ま</sup>

はく<sup>ま</sup>船<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>なりしり事<sup>ま</sup>なりしりけ<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>心<sup>ま</sup>利<sup>ま</sup>益<sup>ま</sup>け

し<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>ず<sup>ま</sup>行<sup>ま</sup>入<sup>ま</sup>既<sup>ま</sup>用<sup>ま</sup>名<sup>ま</sup>録<sup>ま</sup>なりしりし<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>父母<sup>ま</sup>なりしり

勢<sup>ま</sup>なりしりし<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>母<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>衣<sup>ま</sup>後<sup>ま</sup>ありしり

し<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>自<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>洗<sup>ま</sup>淨<sup>ま</sup>なりしり或<sup>ま</sup>なりしり必<sup>ま</sup>入<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>なりしり新<sup>ま</sup>衣<sup>ま</sup>なりしり

若<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>なりしり父<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>郵<sup>ま</sup>風<sup>ま</sup>信<sup>ま</sup>なりしり垢<sup>ま</sup>なりしり痛<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>を

温<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>心<sup>ま</sup>なりしり介<sup>ま</sup>保<sup>ま</sup>濟<sup>ま</sup>畢<sup>ま</sup>なりしり連<sup>ま</sup>序<sup>ま</sup>なりしりか<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>ぬ<sup>ま</sup>者

を<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>お<sup>ま</sup>親<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>者<sup>ま</sup>なりしり<sup>ま</sup>望<sup>ま</sup>能<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>なりしり

博多上



感涙を伴せしむるありて益令の前日しすのぬくありて夜  
 又と暎く帰りの日と大切なるを無念に思はれりて肉外の擗  
 除まじけのそのよむをまじく用ゑるのさうけしむる  
 の朝父母のこのよむをまじく用ゑるのさうけしむる  
 を和すく又母よむの古文のよむをまじく用ゑるのさうけしむる  
 をすねりて一年上二度侍先祖の祭りかきむる物録よりぬん  
 たりて追孝なりしむるにむる父母の其を誅するにんり  
 きしむるにんりしむるにんりしむるにんりしむるにんり  
 一たりしむるにんりしむるにんりしむるにんりしむるにんり

と自ら道にあらん先親の命にあらんはせしむる  
おとく徳に感ずるは場ありあつた他は行葉まもるひ  
帰るけあるは皆父母兄へ共におのせり方今をけか行金を  
血汗の者よは足聞毎後ちよりお清くらんあつた  
今を平日義讓よ敦くも善くもよおのり入る利を  
この心なくかきしうを運と清くもまけるか朋友より  
親よりさく日におひねる利徳と必父母は後一其後  
かかち一徳ありておはるは善くも徳あり  
父母孝養の賜せし又このはよもらんは  
をのう後よ善くも其のうをせりて善くも  
こゝろあつた善くも十善くも徳を何し親は書けを係八十善  
に作る一善くも一投入するは人々その性良しき  
とも早きんか善くも年の身より一徳の善業よく孝善を  
そけしあつた善くも思ふかくせしあつた善くも破れた  
衣後よ善くも善くも善くも善くも善くも善くも善くも  
を徳く善くも善くも善くも善くも善くも善くも善くも  
行法人も徳けり一孝心に徳ありき徳世におくあり  
君聴よも徳けり一徳けり其徳ありき徳世におくあり

博多上

四日









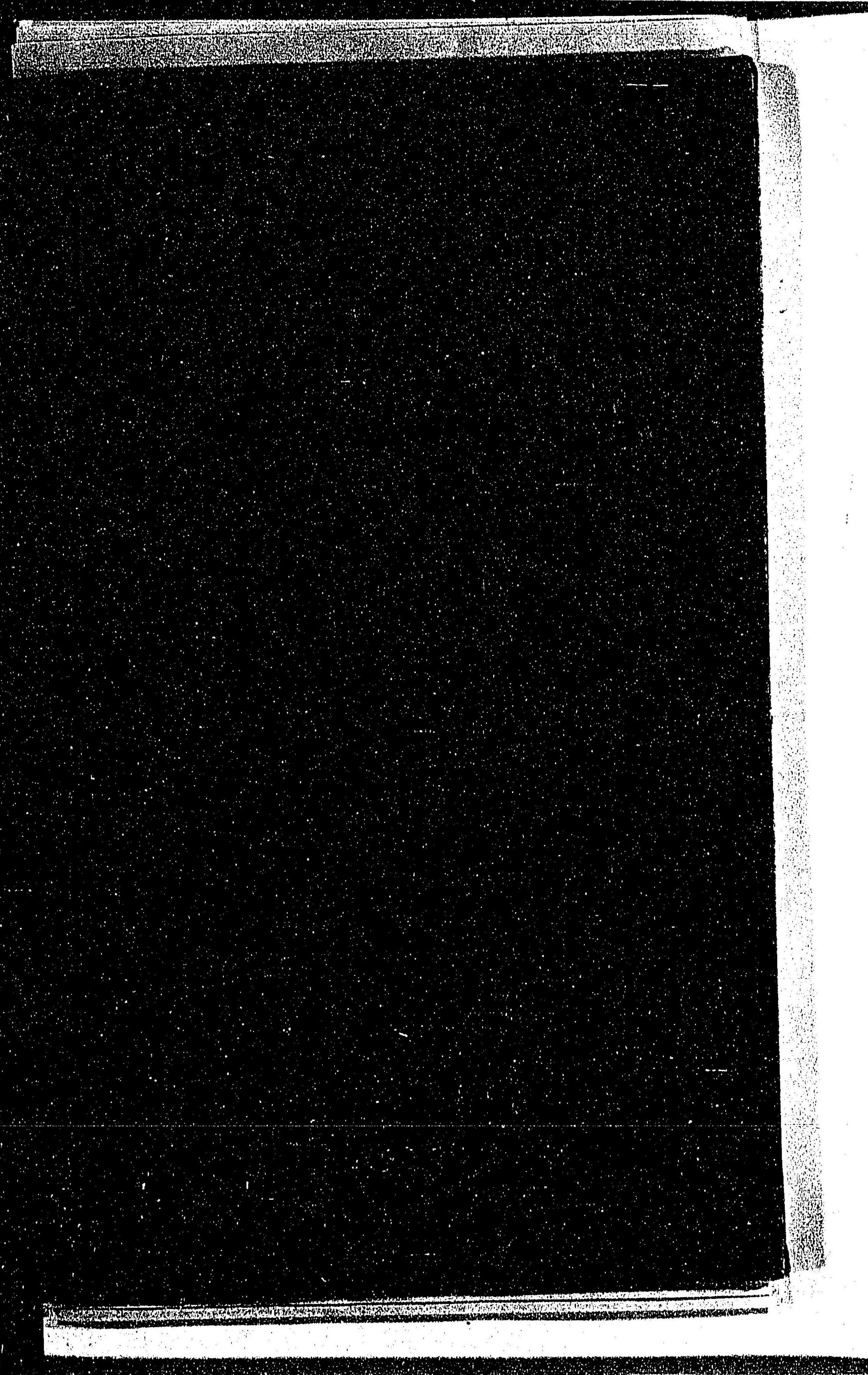
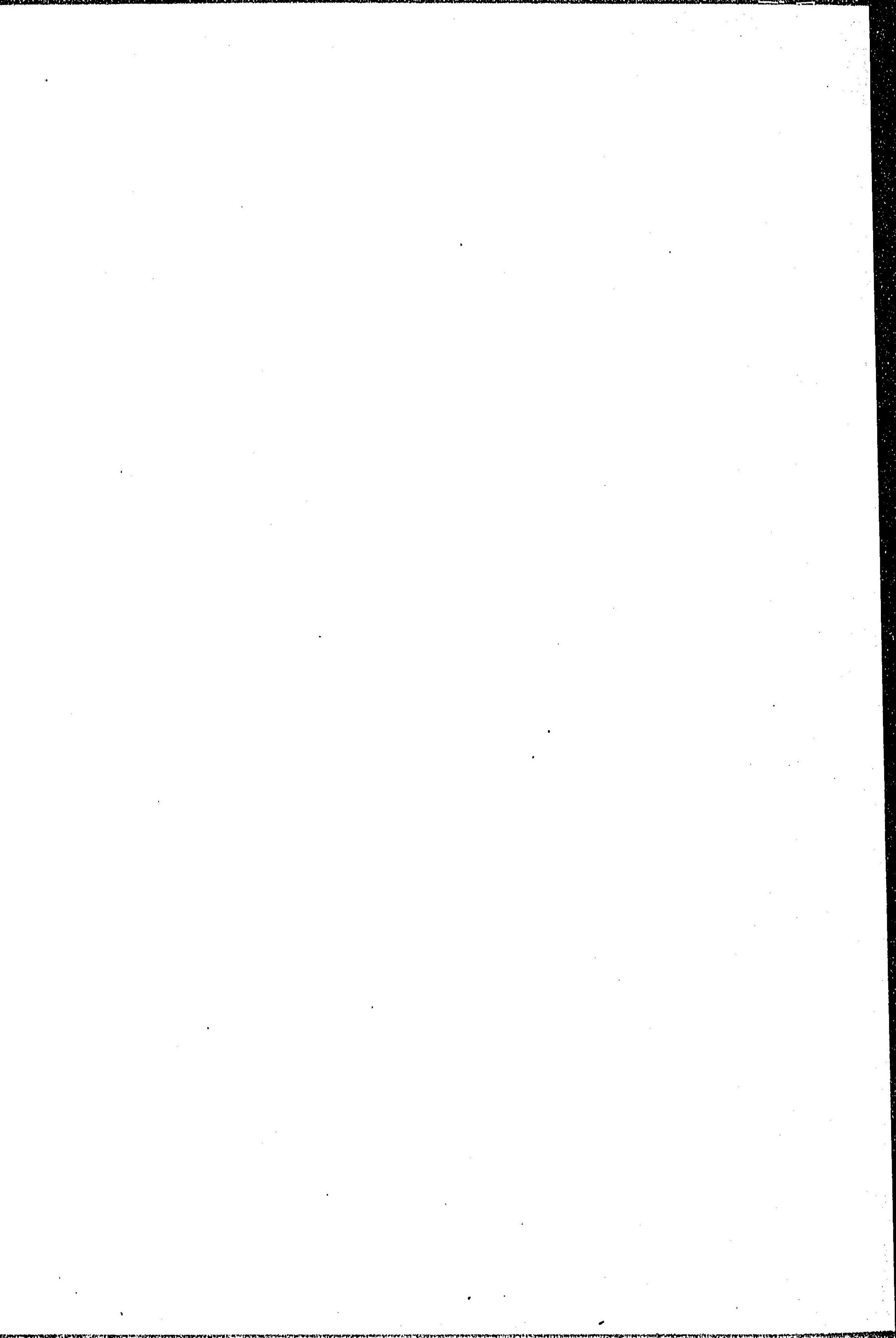
おき井の水をくみ飯を炊き菜を和調一平水の湯をよ  
湧一おきく出過ぎるはかへく母の安否をくかひ又  
會をくこのへきむ事日こたかをくくか一源右  
極めく自愛くく母よ孝あるゆ名可なまふく意母  
源右造つまより河原のまこい源右造つま  
買たるもの價を席より共くく一源右造つま  
て妻あなれハ近隣の者も妻を娶り夫婦く孝を  
あへくく度くく免けくかへくく一妻を  
字へかへく孝のまこい母のあつ

ひやのまこい一歳度も一親一親をくく一源右造つま  
近年母老衰よおし病まこい一年外の病をくく源右  
高しをくくやめを夜付係一人ま病を治すにけき  
や中一多病おかりけきもおの母をくく一源右造つま  
さるくかへく源右造つま孝行達 君聽文政三年辰十二月  
ま銅若子を初めり

筑紫遺愛集卷二終

111  
7  
254

[The right page of the manuscript is almost entirely obscured by dense, dark horizontal bands, likely due to severe damage or heavy ink bleed-through from the reverse side. No legible text is visible.]



026244-001-9

111-254

筑紫遺愛集

伊藤 道保/編

和1冊

M1

ADC-3974



111  
7  
254

筑紫遺愛集

福岡博多

十二